（第3種郵便物認可）

早期診断 装具で治療

先天性股関節脱臼は、生後6か月までの早期に診断できれば8割以上が通院治療で治せる。治療には、リーメンビューゲルという装具を使うのが一般的だ。

神戸市の福山絆生ちゃん(1)は3か月健診をきっかけに左股関節の脱臼がわかり、この治療を受けた。

健診をした小児科医は、左脚が開きにくいことに気づいたが、「大丈夫だと思うけど……」と半信半疑だった。しかし、母親の直子さん(26)が不安を口にすると、整形外科医に紹介状を書いてくれた。兵庫県立こども病院で、エックス線検査により脱臼が確認され、3か月間のリーメンビューゲル療法をすることになった。

この治療は、柔らかいバンドでできた装具を赤ちゃんの胴と両脚に着け、両膝を曲げて脚をM字形に開いた姿勢（カエルの脚のような格好）を常時保つことで、脱臼した股関節をはめる。おおむね3か月程度、入浴の時以外は着け、脚を伸ばした脱臼しやすい姿勢にならないようにする。

同病院のデータでは、リーメンビューゲル療法で股関節をはめることができた患者は82%。ただ、この治療で大腿骨の上端に壊死が起きた例も、軽症を含め8%ほどあった。中には成長が終わっても変形が残ることがあり、注意が必要だ。

同病院整形外科の薩摩真一さんは「昔より患者が減ったことで、今はこの装具になじみのない医師もいる。着け方を間違うと効果がなく、かえって脱臼が重症化することもある。治療の際は、小児病院の整形外科など、症例をたくさん扱っている病院を受診してほしい」とアドバイスする。

絆生ちゃんは、この治療で、外れていた大腿骨の上端は骨盤のくぼみ（臼蓋）にうまくはまり、今は股関節の成長が順調に進むかどうか経過観察中だ。臼蓋の発育が悪いなどの問題があれば5歳前後で手術が必要だが、多くは成長とともに自然に改善するという。

直子さんは「最初は、寝かせ方や抱き方が悪かったかと自分を責めて泣きました。でも、早い時期に治療できてよかった」と話す。

先天性股関節脱臼は、生まれつきの素因とその後の環境要因が重なって起こるとされる。生まれた時は異常がなく、後の生活の中で脱臼する場合もあり、日常生活上の注意によって予防できることもある。

予防策としては、①おむつや衣服で足を締め付け過ぎない②だっこは脚をM字に開いて正面から抱く「コアラだっこ」に③同じ方向ばかり向く「向き癖」があれば、時々別の方向を向かせる――などがある。

絆生ちゃんは、脱臼が早い時期に見つかり、順調に回復している